

函館港イルミネーション映画祭 第27回シナ

リオ大賞投稿作品

15才、最後の夏

く時々、チャイニーズ

チキンバーガーく

作者 Parade556

登場人物表

柗詩 ( 5 ) ( 15 )	バレリーナ
柗瑠美 ( 29 ) ( 39 )	詩の母親
大森大 ( 5 ) ( 15 )	詩の同級生
大森通子 ( 41 )	大の母親
大森啓太 ( 42 )	大の父親。ラッ
	キーピエロの店長
大森哲也 ( 67 )	大の祖父。庭師
菅井裕佳子 ( 22 ) ( 33 )	詩の家政婦
佐竹愛李 ( 15 )	詩の同級生
的野美夕 ( 15 )	詩の同級生
中嶋瞳月 ( 15 )	詩の同級生
徳田太郎 ( 52 )	詩の通う中学校長

あらすじ

将来、有望なバレリーナ・柀詩（15）を中心とした中学3年生のひと夏を描いた物語。

詩は、母親の瑠美（39）に、幼少期から厳しくバレエの指導を受け、国際コンクールで金賞を取るほどのレベルになる。

詩は、幼馴染の大森大（15）と同じ中学に通うも、校長や周りの大人達が詩を特別扱いするため、大を除く同級生とは隙間風が。

そんな中、瑠美は、詩に何も告げず、海外のバレエ学校入学を決めてしまい、詩にとつて、この夏が日本で過ごす最後の夏になってしまう。

練習が終わったある夜、詩は、思い余って瑠美を階段から突き落としてしまう。そのまま瑠美は意識不明の重体となる。

詩は、瑠美のいない日常で、花火大会に行こうとしたり、暴飲暴食をしたり、これまで味わってこなかった「普通」を味わう。

同時に、母親を突き落としたという罪悪感

に苦しみ、幼馴染の大にだけ、そのことを告げたため、大も苦しむことになる。

そんな中、母親の瑠美が目を覚ました。詩は、瑠美が自分のしたことを言い出さないかどうか不安になり、周囲に対して疑心暗鬼となっていく。瑠美に依頼され、瑠美が教えていた幼児・児童のバレエスクールのコーチをするも、心労で倒れてしまう。詩は、瑠美のいない間に怠けたツケで、体重が落ちなくなってしまう。そのせいで大とも喧嘩をしてしまう。

詩は、瑠美の前で、瑠美を突き落としたことを告げようとするが、瑠美は瑠美で、これまで厳しく指導しすぎた自分を反省していた。

瑠美から、

「最後に、お世話になった皆さんの前で踊って、バレエを辞めていい」と言われ、詩は大や仲間達の前で踊る。詩は改めて自分のバレエが、たくさんの人を感動させていたことを知り、バレエを続けることを決意する。

○函館・元町公園

T・「10年前」

快晴。

公園から海がよく見える。基坂をたくさん  
の観光客が行きかう。

○詩の家・全景

西洋館。 \*モデル（旧函館区公会堂）

○同・駐車場

たくさん車が駐車。

ナンバープレートは、北海道だけでなく、  
本州からも。

ピアノの音（音響機材を使用）。

○同・2階の舞踏会場

バレエの練習中。

幼稚園くらいから小学校高学年の子供  
たちがフロアで練習している。

バルコニーで見ている生徒たちの父兄。

柊瑠美（29）、笑顔で子供たちを見ている。

バルコニー側、開け放たれたカーテンの向こうに広がる函館の街。よく晴れている。

部屋の端にある回廊につながるドアが、ほんの少し開く。

#### ○同・回廊

柊詩（5）、ドアの隙間から身を縮かませて練習を見ている。部屋の向こうの温かい雰囲気とは真逆の表情。ピアノが鳴りやむ。

瑠美「はい。それでは今日の練習、終わります」

詩、慌ててドアを閉めると、回廊の先にある階段を駆け下りていく。

#### ○同・舞踏会場

子ども達の姿はない。

家政婦・菅井裕佳子（22）がカーテンを閉じていく。

○同・駐車場

最後の車が駐車場から出ていく。

瑠美、頭を下げて見送る。

○同・舞踏会場

詩、ストレッチをしている。

瑠美、入室。先ほどとは打って変わり、その顔から笑顔が消えている。そしてその手には鞭を持っている。

瑠美、詩の傍までくると開脚をしている背中を無言で、グイ、グイと押す。

詩、痛がる。

瑠美、険しい表情で押しつづける。

詩、声を出すことを我慢する。

× × ×

ピアノが鳴る中、センターレッスン。

瑠美「違う。腕」

ぴしやりと、詩の腕を叩く。

詩、痛みをこらえて踊る。

瑠美「足、何度言ったらわかるの」

詩、足を叩かれる。泣きそうになりながら踊る。

瑠美「もう良い」

詩「お母さん」

瑠美、ピアノを流していた音響機材に近づいていく。

詩、瑠美に追いつがるも振り払い、電源をOFFにする。

詩、瑠美の腕にしがみつく。

瑠美「できないなら止める」

瑠美、詩の腕を取るとバルコニーへ引っ張っていく。

詩「ごめんなさい。お母さん。ごめんなさい」

○同・バルコニー

詩「ちゃんとやるから。ちゃんとやるから」

瑠美、詩をバルコニーに押し出すと鍵

を閉める。

詩「いや、いや」

詩、扉窓をどんと叩く音。

詩の声「お母さん。お母さん」

瑠美、去っていく。

○同・前庭

庭仕事をしている大森哲也（67）と

大森大（91）

大、立ちあがりバルコニーを見ている。

大森「大、集中してやらんか」

大「うん」

大、大森の手伝いをする。

○同・バルコニー（夕方）

詩、しくしく泣いている。

大、建物をよじ登り、詩のもとへ。

大「また泣いてんのかよ」

詩「うるさい」

大「泣き虫だなあ」

詩「あっち行け。猿」

大「へへ泣き虫い」

詩「うるさい」

大、バルコニーの棧にまたがり笑う。

○同・舞踏会場（別の日）

詩、踊っている。

瑠美、詩に向かって鞭を振るう。

鞭が詩に当たる音。

○同・1階のエントランス

\*時間経過く10年間（現在まで）

断続的につづく鞭の音。

国内外のバレエコンクールのトロフィー

ーや賞状がどんどん増えていく。最後

に、ジャクソン国際バレエコンクールの

の金賞のトロフィーが置かれる。

○詩と大の通う中学校・講堂

柗詩（15）が表彰されている。

校長の徳田太一郎（52）、スタンド  
マイクの前に立ち、

徳田「柗詩さん。あなたは世界三大バレエコンクールのひとつ、アメリカのジャクソン国際バレエコンクールのジュニア部門で、日本人として初めて金賞を受賞されました。本校の名前を広く世界に広めていただいたことを、ここに表彰いたします」

詩、徳田から表彰状を受け取る。

拍手する生徒たち。でもどこか醒めた  
反応。

生徒の中に、佐竹愛李（15）、的野  
美夕（15）、中嶋瞳月（15）の姿。  
大森大（15）だけが、周りが引くほど盛大に拍手をしている。

○同・全景

屋上から、ジャクソン国際バレエコンクール金賞の垂れ幕。校舎の壁面に下がっている。他にもローザンヌ国際バ

レエコンクールやモスクワ国際バレエ  
コンクール（昨年）で受賞した垂れ幕  
が下がっている。

○同・教室

昼休みのチャイムが鳴る。

詩、ひとり弁当を持って教室を出る。

大、詩を追いかけて教室を出ていく。

○同・ごみ焼却場

日陰の薄暗い場所にボロボロのベンチ  
が一つ。

詩、そこに座り弁当を食べている。中  
身は、ブロッコリーや鳥のささ身のみ。

大、現れる。

大「またここかよ」

詩「うるさいな」

大「よくそんなマズそうなもん毎日食えんな」

詩「うざい」

大「（詩の声真似）あっち行って」

詩「は？」

大「セリフ、先に取ってやった」

詩「うざい。ほんと」

大「すごいねえ。世界のバレリーナは。なん

だっけ？ジェイソン？ジェイミー？あれ、

なんだっけ？」

詩「ジャクソン」

大「ジャクソン。オッサンの名前じゃん」

詩、無視して食べはじめる。

大、隣に座ると、弁当を入れた袋から

ラッキーピエロのチャイニーズチキン

バーガーを2個、取り出す。そのうち

の1個を食べはじめる。

大「好きなもん食わない人生、損するよ」

詩「…」

大「1個、やろうか」

詩「いらない」

大「世界でいちばん美味しいんだぜ。コレ」

詩「くさい」

大「そりやくさいだろ。こんなとこいたら」

詩「違う。ソレ」

詩、大のハンバーガーを指さす。

大「え？サイコーじゃん」

詩「近づけんな」

大「うえーい」

詩「マジうざい」

ハンバーガーのソースが、ササミの上  
に落ちる。

詩「あ…最悪」

大「ソースかかって美味くなったって」

詩「もう、食べれないじゃん」

大「じゃあ、俺食うわ」

大、ソースのかかったササミを食う。

大「マジ、味しねえ。やっぱ、こっちの方が  
いいや」

大、ハンバーガーをほおぼる。

詩も弁当を食べはじめる。

大「海外とか行かねえの？」

詩「留学ってこと？」

大「そう」

詩「すぐはないでしょ」

大「そっか」

○詩の家・玄関

詩、柗瑠美（39）の前で体重計に乗る。瑠美、バインダーに体重を書き込んでいく。

瑠美「今夜の準備、すぐはじめてちょうだい」

詩「はい」

○同（夜）

ドレスアップした詩と瑠美。たくさんの客を出迎えている。校長の徳田や、バレエ教室の子供たちや父兄の姿も。

○同・エントランス（夜）

たくさんのおトロフィーや賞状。

写真を撮る客たち。

詩と並んで写真を撮る客もいる。

○同・舞踏会場（夜）

パーティー。

瑠美、ステージの上、スタンドマイクの前に立つ。

隣には詩。

瑠美「皆様。本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。娘の詩について、皆様に発表がございました。

詩はこの秋、英国ロイヤル・バレエ学校への入学が決まりました」

歓声や拍手が沸く。

詩、一瞬、驚いた顔をするも、瑠美の視線で笑顔に変わる。

瑠美「この子は、世界一のプリンシパルになるため、これからもっともっと精進してまいります。皆さまの変わらぬご支援のほど、よろしくお願い申し上げます」

× × ×

ステージを下りた詩と瑠美の周りを、客が取り囲んでいる。

客A「さすがね。名門のバレエ団でしょ？」

客B「やっぱり、お母さま譲りの才能あるから。詩ちゃんは」

瑠美「ありがとうございます」

詩「（耳打ち）お母さま。化粧室へ」

瑠美、何も言わずうなづく。

詩、笑顔で人波を縫い、部屋を出る。

#### ○同・回廊（夜）

詩、ドアを閉めるとうつむく。

窓に映る自分の顔に気づく。今にも泣

き出しそうな顔である。

詩、階段をダツと駆けおりていく。

#### ○中学・教室

詩の周りに愛李、美夕、瞳月がいる。

大、離れたところで座って見ている。

愛李「じゃあ、どうすんの中学？」

詩「うん。1学期が終わったら辞める」

美夕「そりゃそうでしょ。イギリス行くんだ

し」

瞳月 「すごいなあ。行きたい。イギリス」

愛李 「アンタじゃ無理だし」

美夕 「じゃあ、アレ？もうプロになっちゃう

感じ」

詩 「どうだろう。バレエ団に入団できるかど

うかはわからないんだ」

愛李 「イケるって。絶対。詩ちゃんなら」

美夕 「でもすごいよ。前から決まってたの？」

詩 「…うん。決まってた」

愛李 「ええ。言ってよお」

美夕 「そうだよ。ウチラ友達じゃん」

詩 「ごめんね」

瞳月 「大は知ってたの？」

大 「知らね」

瞳月 「何よ。幼馴染じゃん。二人」

大 「…」

瞳月 「うわっ。無視だ」

愛李 「いじけんなよ大」

美夕 「ださっ」

大「うるさいよ」

周囲から笑いが起こる。

○同

終礼のチャイムが鳴る。

一斉にテーブルと椅子を教室の後ろに

下げる生徒達。

詩、同級生たちが掃除をしたり、談笑

する中、一人出ていく。

愛李、美夕、瞳月、掃除当番表の前に

立っている。

愛李「やっぱ不公平じゃない？なんで、やん

なくていいわけ？」

美夕「しょうがないじゃん。ウチラとは違う

んだから」

掃除当番表の中に、詩の名前はない。

瞳月「マジ、怪我とかしないかな」

愛李「うわ。最悪」

美夕「非国民」

瞳月「こういう時に言う？ソレ」

笑い合う3人。

○校庭

詩、ひとり日傘を挿して歩いている。

詩の横を通り過ぎる女子生徒二人。

女生徒A「また太ったあ」

女生徒B「食いすぎっしょ」

二人と詩の体型を比べた時、詩は不自

然なほど女性らしい丸み（膨らみ）が

体がない。

○正門の外

瑠美の運転する車が停まっている。

○瑠美の車

詩、後部座席のドアを開けて乗る。

詩「ただいま」

瑠美「早く乗って」

詩「はい」

詩、後部座席のドアを閉める。

瑠美の車が動きはじめる。

下校する生徒達が歩道を歩いている。

瑠美「ほんと、無駄な人生」

詩「…」

瑠美「何の目的もない人生」

詩「…」

瑠美「でも、こういう連中があなたを支えるの。だから絶対に敵に回さないでちょうだい」

詩「はい」

瑠美「何もやらない人間の嫉妬は、しつこくて根深いから。母さん、何度も味わったから。絶対に敵に回さないで」

詩「はい」

× × ×

函館の海沿いを走る瑠美の車。

詩、黙って外を眺めている。

× × ×

元町の坂を上っていく瑠美の車。

詩の表情が曇っていく。

○詩の家・舞踏会場

締め切ったカーテン。

壁にはチャイコフスキーの肖像画が掛けられている。

眠れる森の美女、オーロラ姫が長い眠りから目覚める「目覚めのパ・ド・ドゥ」の練習中。

デジレ王子役を瑠美が務める。

瑠美「もっと、先生の音楽を感じなさい」

詩、踊りつづける。

瑠美「先生の言葉、想い、すべてが音の中に  
あるでしょ」

詩、踊りつづける。

瑠美「もっと音の隅々まで感じて」

○大の家・全景

大、帰ってくる。

○同・仏間

祖父・哲也の遺影。

大、手を合わせる。

大「じいちゃん。俺、店行ってくるわ」

○ラッキーピエロ・店内

店内は混雑している。

カウンターでレジ打ちをしている大森

通子（41）

大「母さん。ただいまあ」

通子「早く手伝って。厨房」

大「オッケー」

○同・厨房

大森啓太（42）がハンバーガーを作  
っている。

啓太「おお。おかえりい」

大「すぐやるよ」

啓太「おお。助かる」

大、手を洗い、手伝いはじめる。

○店内

大盛況。

ハンバーガーやらカレー、ナポリタン  
にスイーツがあちこちのテーブルに並  
んでいる。

○詩の家・1階の食堂（夜）

詩と瑠美では広すぎる円卓。上座に瑠

美が座り、遠く離れた下座に詩。

質素な食事（前シーンと真逆）

菅井裕佳子（33）が給仕をしている。

瑠美「8月の終わりには、日本を発つから」

詩「はい」

瑠美「3年間、きちんと勉強してきなさい」

詩「はい」

瑠美「前にも言った通り、そのままロイヤル

バレエ団に入ることが目標よ」

詩「はい」

瑠美「日本には、もう戻らないくらいの覚悟

でいてちょうだい」

詩「…」

瑠美「返事」

詩「はい」

○ラッキーピエロ・店内（夜）

閉店後。

大、啓太、通子が掃除をしている。

啓太「しかし今日も忙しかったなあ」

通子「やっぱりコロナもあけて、外国のお客

様、増えてきたもんね」

啓太「もう一人くらい雇うかなあ」

通子「土日の遅番だけでも欲しいね」

啓太「募集出すか」

通子「（大に向かって）アンタも、休みの日

くらい友達と遊びたいっしょ」

大「ええ？オレ？オレは良いよ。別に」

通子「ずっと働いてばっかじゃないの」

大「別に。俺、好きだし」

啓太「泣けるねえ」

通子「ダメよ。子供らしいことしなくちゃ」

啓太「早いうちに、働くこと覚えておいた方

がいだろ。将来のためにも」

通子「ダメよ。この子にはこの子の人生があるんだから」

大「俺は高校でたら、この店で働くつもりだよ」

啓太「大」

通子「まだもう少し考えなさい」

啓太「母さん」

通子「これは大の人生なの」

大「母さん。俺、この店が好きだし、何よりもこの町が好きなんだよ」

通子「それは、他を知らないからよ」

大「札幌は行ったことあるだろ」

通子「それはちっちゃい時でしょ」

大「でも、やっぱ、なんか違ったんだよ」

大、客のいない店内を見回して、

大「俺、店にお客さんがたくさんいる時が、

一番幸せなんだ。楽しいんだよ」

啓太「くーっ。オマエ、最高だよ大」

通子「大」

大「だから俺は、この町からは出ていかないよ」

通子「じゃあ、詩ちゃんとは離れ離れになるのね」

啓太「そりゃ、しょうがねえだろ」

通子「父さんに話してないでしょ」

啓太「ひー。こえー」

大「…俺とアイツは、違うよ」

通子「夏には、行っちゃうんでしょ？」

大「ああ。それくらいかな」

通子「かなって。アンタ…」

3人、押し黙る。

啓太「お。もうこんな時間だ。早く切り上げて帰ろう」

通子「あ、ほんとだ」

啓太と通子、片付けはじめる。

大、窓の外を見る。

○詩の部屋（夜）

詩、一人眠れずに天井を見上げている。

部屋の中に流れるチャイコフスキー。

○中学・全景（朝）

登校。

詩、一人だけ日傘を挿して歩いている。

自然と他の生徒達がよける。

○体育の授業（屋外）

他の生徒たちが走り幅跳びをする中で、

詩、ひとり日傘を挿して見学している。

○家庭科の授業

パウンドケーキを作っている。

全員で試食する中、詩は食べない。

○詩の家・舞踏会場（夕方）

詩、チャイコフスキーの音楽に合わせて

て踊っている。眠れる森の美女、クラ

イマックスシーンのソロパート。

瑠美、鞭を持ったまま何度もうなずき、

瑠美「そうよ。そう。先生の言葉を感じて。

先生の言葉のままに」

詩、踊っている。

○同・食堂（夜）

家政婦たちが食事の準備をしている。

○同・舞踏会場（夜）

練習終わり。

詩「ありがとうございました」

瑠美、詩に背を向けて回廊に出ていく。

詩、ついていく。

○同・回廊（夜）

瑠美「忠実に、先生の言葉のままに踊るの」

詩「はい」

瑠美「あなたは、忠実なパペットになるの。

自分の意思なんていらなのよ」

瑠美、階段を下りていく。

詩、後ろから瑠美を突き飛ばす。

瑠美、階段を転がり落ちていく。

階下から裕佳子が現れる。

裕佳子「奥様。奥様」

遠くから救急車の音。

○病院・集中治療室（夜）

瑠美、治療を受けている。

○同・廊下（夜）

医師の男の前には、詩と家政婦。

医師「ぶつけたところが悪かったです」

詩「…」

医師「意識が戻るかどうか、今はまだわかりません」

詩、うつむく。

裕佳子、詩の肩を抱く。

医師「詩ちゃん。こんな大事な時に…」

○ラッキーピエロ・厨房（夜）

店の電話が鳴る。

通子が電話に出る。

通子「お電話ありがとうございます。ラッキ  
ーピエロ…え？ほんと」

大、厨房で働いている。

通子「大。大」

大「何？」

通子「詩ちゃんのお母さんが倒れたって」

大「え？マジかよ」

通子「家で、事故があったみたい」

大「マジかよ」

通子「大、行ってきな。行ってきなって」

大「でもさ…」

店は、混雑している。

通子「いいから。行っておいで」

大「母ちゃん」

○裕佳子の運転する車・車内（夜）

詩、後部座席に座っている。

○元町の坂（夜）

大、チャリンコを漕いで上がってくる。  
ラッキーピエロの制服を着ている。

○詩の家・全景（夜）

大、家の前に立っている。インターフ  
オンを押そうか迷う。

大「アイツ、大丈夫かよ」

裕佳子の運転する車が戻ってくる。

大「あ…」

大、駐車場に入っていく車を見送る。

○同・駐車場（夜）

裕佳子、運転席から降りてきて後部座  
席のドアを開けると、抱きかかえるよ  
うにして、詩を外に出す。

大「（言葉を失う）」

○同・食堂（夜）

冷めた食事が並んでいる。

裕佳子「お嬢様、お食事は？」

詩「いない」

○同・詩の部屋（夜）

詩、ベッドの上に転がり込む。

詩、震えている。

部屋をノックする音。

裕佳子の声「お嬢様。こんな時ですけど、先

生の音楽はかけられた方が」

詩「気分じゃない」

裕佳子の声「お嬢様」

詩「少し、一人にして」

裕佳子の声「失礼しました」

裕佳子の足音、去っていく。

○中学・教室

詩の周りに集まる愛李たち。

愛李「お母さん、大丈夫なの？」

詩「わかんない」

美夕「詩ちゃん。大事な時なのにね」

詩「…うん」

瞳月「ウチラ、応援するからね」

○同

昼休みのチャイムが鳴る。

詩、教室を出ていく。

○同・ごみ焼却場

詩、ベンチに座りいつもの弁当を食べ

ている。

大、現れる。

大「大丈夫なのかよ」

詩「大丈夫」

大「心配だな」

詩「…別に」

大「え？」

詩、弁当を食べ始める。

大、ハンバーガーの包みを開いて食べ

始める。

詩「それ、ちよつとちようだい」

大「え？」

詩「ソレ」

大「マジで言ってる？」

詩「マジ」

大「大丈夫なのか？」

詩「もう、関係ないし」

大「なんで？」

詩「バレエ、やらなくていいから」

大「マジ？」

詩「マジ」

大「あのさ…」

詩「突き落としたんだ。アタシが。母親のこ

と」

大「は？」

詩「階段から。だから、警察に捕まるし。バ

レエどころじゃないでしょ」

大「待て待て待て。マジ、意味わからん」

詩「だから、ちようだいよ」

大「いやいや、意味わからん」

詩「くれるって言ってたじゃん」

大「いや、その前に確認したいことが多い」

てき」

詩「どれ？」

大「まず…お母さんのこと」

詩「母親は…」

愛李たちが現れる。

愛李「詩ちゃん。いつもこんなトコで食べて

んの？」

美夕「弁当、まずくなんじゃん」

瞳月「ウチラと食べようよ。部室空いてるし」

詩「ありがとう」

愛李「行こ。行こ」

美夕「（大に向かって）アンタは、ここで一

人で食ってな」

大「うるせえよ」

詩、弁当を仕舞う。

愛李たちに連れていかれる。

大、詩の背中を茫然と見つめる。

### ○同・教室

終礼のチャイムが鳴る。

一斉にテーブルと椅子を教室の後ろに  
下げる生徒達。

× × ×

大、窓越しに、日傘を挿した詩が校庭  
を歩いている後姿を見ている。

○（回想）ごみ焼却場

詩「突き落としたんだ。アタシが。母親のこ  
と」

○元の教室

大「…オマエ、マジかよ」

愛李「何、見惚れてんだよ。大」

大「うるせえな」

美夕「諦めろって。住む世界が違うんだよ」

大「そういうんじゃないよ」

瞳月「ださ。大。オマエも函館出て夢でも追

えば？」

大「俺は、俺の人生、後悔してねえし」

愛李「なんかカッコつけてる。うぜえ」

美夕「15のくせに」

瞳月「暑苦し」

大「うるせえな」

○ラツキーピエロ・店内

今日も混んでいる。

○同・厨房

大、啓太と並んで調理をしている。

大、レジで接客している通子を見る。

啓太「何、母ちゃんに見惚れてんだ」

大「そんなんじゃねえよ」

啓太「母ちゃんに見惚れていいのは、世界で

俺だけだぞ」

大「キモいこと言うな」

大、調理を再開する。

啓太「詩ちゃん。心配だな」

大「うん」

啓太「土日な、一人バイト採用したんだ」

大「うん」

啓太「オマエ、詩ちゃんどこ行ってやれよ。」

今度、花火大会あるだろ」

大「ああ。聞いてみるけど」

啓太「日本にいる最後の夏なんだからよ」

大「うん」

○詩の家・舞踏会場（夕方）

チャイコフスキーの音楽が鳴る中、詩、  
踊っている。

眠れる森の美女、クライマックスシー  
ンのソロパート。

しかし踊るのを止める。

チャイコフスキーの音楽が流れている。  
チャイコフスキーの肖像画が、詩を見  
つめている。

詩、すたすたと歩いていき、閉じたカ  
ーテンの前に立つ。

詩、カーテンを開く。

バルコニーの向こうに函館の街。夕焼  
けに染まった街。

チャイコフスキーの音楽が終わる。

詩「うわぁ」

詩、生まれて初めて見たかのように、

その美しさに見惚れる。

風が吹き込んでくる。

詩、気持ちよさそうに風を受ける。

詩「気持ち良い」

○同・食堂（夜）

詩、一人で食事をしている。

○病院・集中治療室の廊下（夜）

詩と裕佳子、ベッドに寝ている瑠美を

見ている。

○裕佳子の運転する車内（夜）

詩、後部座席から外を見ている。

函館駅前の歓楽街。

楽しそうに遊ぶ若者たち。

裕佳子「お嬢様」

詩「…」

裕佳子「留学の準備は予定通り進めましょう。

奥様も、それを望まれていると思います」

詩「…」

○函館駅前く商店街（朝）

函館の花火大会を宣伝するポスターが、

あちこちに貼られている。

○中学・教室

休み時間。雑談する愛李たち。

愛李「行こう。絶対」

美夕「行く行く」

瞳月「大は？」

大「俺は、店あるから」

愛李「花火大会の日くらいいいじゃん」

大「無理だよ。お客さんいっぱい来るし」

美夕「アンタの母ちゃんに言ってやろうか」

大「良いよ。止めろって」

瞳月「なんかダサ」

大「うるさいよ」

詩、愛李のそばに近づいてきて、

詩「私も、行こうかな」

愛李「え？」

詩「花火大会」

美夕「マジ？」

瞳月「無理しない方が良いつて。お母さんの

…あ」

愛李「バカ」

大、詩の顔を見る。

詩「最後の夏だし」

愛李「そ、そっか。そうだよね。日本にいる」

大、詩の顔をまじまじと見る。

美夕「アンタ、詩ちゃんの顔見すぎ」

瞳月「恋してんじゃねえよ」

大「バカ。そんなんじゃねえし」

愛李「じゃあ、行こうね。絶対」

詩「うん」

○同・校長室

徳田が、愛李、美夕、瞳月に怒鳴っている。

○同・校長室の前の廊下

愛李たち、うなだれて出てくる。

○同・教室

愛李たちの周りに集まる生徒達。

愛李「なんで、ウチラが怒られるわけ」

美夕「行きたいって言ったの向こうじゃね」

瞳月「そうそう」

愛李「（徳田の声真似をして）詩さんは、この町の誇りなんだ。お前らの遊びに付き合  
うわけないだろ…だって。ざけんな」

美夕「ざけんな」

瞳月「アレ、大は？」

愛李「店じゃね」

美夕「アイツもアイツだわ」

瞳月「ほんと、大嫌い」

○詩の家・玄関

詩、体重計に乗る。

計測している裕佳子の顔色が変わる。

裕佳子「あれ？あ、もう1回、乗ってください

い」

詩、もう一度乗る。

体重が、1キロ増えている。

裕佳子「どうしよう」

○同・舞踏会場（夕方）

チャイコフスキーの音楽が流れる。

詩、ステージの中央で動こうとしない。

音楽が終わると、詩、バルコニーのカ

ーテンを開く。綺麗な夕焼け。

詩、窓の外を眺めている。（前回のよ

うな感動はなく、ただ人形のように眺

めている）

○ラッキーピエロ・店内（夜）

閉店後。

大、啓太、道子でハンバーガーを食べ  
ている。

啓太「やっぱ、うめえな」

通子「もう遅いから、食べたらすぐ帰るよ」

大「(食べている)」

通子「大。花火大会の日ね、シフト、大丈夫

だから」

啓太「そうそう。行ってこい行ってこい」

通子「さつき、瞳月ちゃんから電話あつてね」

大「…アイツ」

通子「みんなで楽しんでらっしゃい」

啓太「たまには羽伸ばしてこいよ」

大「俺は」

通子「詩ちゃんと過ごす最後の夏でしょ」

啓太「そうそう。バーンと、思いの丈ぶつけ

てこいよ」

通子「バカ」

啓太「…あ」

大「最後の…」

○（回想）ごみ焼却場

詩「突き落としたんだ。アタシが。母親のこ  
と」

○元の店内（夜）

大「わかったよ。行くよ」

大、立ちあがる。

通子「母さん。捨てとくから、先帰りな」

啓太「おお。帰れ帰れ」

大「うん」

大、店を出ていく。

啓太「ありや、恋してるな」

通子「ええ!!父ちゃんでもわかるの」

啓太「わかるだろ。さすがに」

通子「ちょー鈍感男なのに」

啓太「あのなあ」

通子「でも、叶わぬ恋だよ」

啓太「ウチがもつと金持ちだったらなあ」

通子「ロミオとジュリエットのな」

啓太「アレ、両方とも金持ちじゃなかったっ

け」

通子「なんで知ってんの？そういうの」

啓太「わかんね。なんかで見た」

通子「どこで見んの。そんなの」

啓太「忘れたよ」

通子「都合悪くなると、すぐ忘れんだから」

啓太「うるせえな」

○店の前の通り（夜）

大、歩いている。

大「…マジで、この先どうすんだよ」

○詩の家・舞踏会場（夜）

詩、ドレスアップしている。

たくさんの客が来ている。徳田も、バ

レエの生徒たちも、瑠美を診察してい

る医師も。

徳田、詩の傍に進み出て、

徳田「函館の街をあげて、詩さんのロシア留学を応援しましょう」

歓声が上がる。

徳田「詩さんは、この街の誇りです」

○病院・集中治療室（夜）

瑠美、眠っている。

○詩の家・舞踏会場のバルコニー（夜）

詩、ドレス姿のまま座っている。

函館の街を見ている。

裕佳子「お嬢様。お入りください。夜風が冷

たくなってまいりました」

詩「…」

詩、街を見ている。

家の前を人が通る。

裕佳子「お嬢様」

詩「やめて」

裕佳子、詩を無理矢理、室内へ。

裕佳子「人が見えています」

詩「ウザい」

裕佳子「どこでそんな汚い言葉を覚えたんで

すか？」

裕佳子、バルコニーのカーテンを閉じる。

詩、また開けようとして押し問答になる。

詩、押し負けてしまい床に倒れる。

裕佳子「大丈夫ですか」

詩「触らないで」

裕佳子「お嬢様。奥様がいらつしやらないの

で、ご不安になる気持ちはわかります」

詩「そんなんじゃないから」

裕佳子「お嬢様」

詩「関係ない。そんなの。だって、だって私  
が……」

裕佳子「え？」

詩、立ちあがると部屋を出ていく。

○中学・教室

期末テスト終了。

終礼のチャイムが鳴る。

愛李 「やっと期末終わったあ」

教師 「まだ終わってないぞお。喋るな」

後ろの席の生徒から、問題用紙と回答

を前の席の生徒に回していく。

詩や大の姿もある。

○同

終礼が終わり、椅子と机を下げた掃除  
中。

掃除用具を持ちながら話す愛李たち。

愛李 「花火大会、チョー楽しみ」

美夕 「あ、場所取りしなきゃ」

瞳月 「あ、アタシやるわ」

愛李 「マジ？神」

瞳月 「任せて。良い手あるんだわ」

美夕 「頼むよマジで」

瞳月 「余裕だから」

美夕 「ほんとかよお」

愛李 「ていうかさ」

愛李、校庭を見る。

詩が日傘を挿して歩いている。

愛李「あの子、誘わなくていいんだよね」

美夕「いいっしょ。校長にキレられるだけだし」

愛李「だよね」

瞳月「大。日曜、夕方の5時に駅前集合で」

大「ああ。わかった」

○函館駅・駅前（夕方）

花火大会当日。

街は賑わっている。

客も多く、出店もある。

浴衣姿の愛李と美夕。

大や、他の同級生もやってくる。

大と同級生は、手分けしてラッキーパー

エロの商品を持っている。

○シーポート公園（夕方）

あちこちで、ブルーシートで場所取り

されている中、最前列のブルーシート

に瞳月がいる。

瞳月「おーい」

愛李「オマエ、マジ最高」

美夕「ベスポジじゃん。朝から頑張った系？」

瞳月「うん。弟にやらせた」

愛李「うわ。最悪」

瞳月「いいじゃん。家族なんだし」

美夕「ちな、弟くんは？」

瞳月「え？家に帰らしたけど」

愛李・美夕「マジ最悪」

瞳月「いいじゃん。場所とったんだから」

大「とりあえず、食おうぜ。俺の母ちゃんの

おごり」

愛李・美夕・瞳月「大の母ちゃん、マジ神」

× × ×

美味しそうに食べている。

愛李「やっぱ、大、使えるわ」

美夕「マジ使える」

大「お前ら、そのために俺呼んだんじゃない

だろうな？」

愛李「バレたか」

笑いが起こる。

大「ざけんなよ」

和やかな雰囲気。

○同（夜）

花火大会が始まる。

みんな、花火に夢中になっている。

大、チャイニーズキンバーガーを2

つ持ち、みんなが花火に夢中な中、そ

の場を離れていく。

瞳月、大の姿を目で追う。

○詩の家・全景（夜）

詩、バルコニーのカーテンを少し開け

て花火を、目を輝かせて見ている。

\*生まれて初めて見た花火。

○同・バルコニー（夜）

大、バルコニーを上がってくる。

大「よお」

詩、窓越しに驚く。

詩「うわ」

大「驚くなよ。今更」

詩、窓を開ける。

詩、バルコニーには出てこない。

大はバルコニー側にいて、窓を挟むよ

うな恰好で座る二人。

大「なんか、ガキの頃思い出すな。オマエが

よく泣いててさ」

詩「いいから」

大「コレ、もってきた」

大、チャイニーズチキンバーガーを一

つ、詩に渡す。

詩、受け取らない。

詩「…いらない」

大「じゃあ、俺が食うわ」

詩、じつとハンバーガーを見る。

大「もつたいねえなあ。美味しいのになあ」

詩、大からハンバーガーを奪いとるも、

袋を開けることを躊躇っている。

大、詩の代わりに袋を開けてやる。中からチャイニーズチキンバーガーが出てくる。

大「まあ、食ってみろって」

詩「…」

大「一口でもいいから」

詩、一口食べる。

詩「…おいしい」

大「だろ」

詩、パクパクと食べはじめる。

火花が次々とあがっている。

詩「こんな美味しかったんだ」

大「だろ。人生、損してたろ」

詩「うん。損してた」

詩、パクパクと食べている。

大「もつと持ってきてくりや良かったな」

詩「おいしい」

大「これも食えよ」

詩「うん」

詩にもう1個のハンバーガーを渡す。

大、詩が美味しそうにハンバーガーを食べている姿を見ている。

花火が打ちあがる。花火に花火が重なり、盛大に弾けて消える。

詩、美味しそうに食べている。

不意に、詩の目から涙が流れる。

大、詩が泣いていることに気づき、花

火の打ちあがる方を見る。次の花火が

打ちあがらない。

大「あれ…もしかして終わり？」

詩、何も言わず泣いている。

○病院・集中治療室（夜）

瑠美、眠っている。

○詩の家・バルコニー（夜）

大、花火が上がっていた方向を見る。

○シーポート公園（夜）

花火大会終わり。

愛李たち、帰り支度をはじめ。

愛李「あれ？大は」

美夕「あれ、いねえ」

瞳月「帰ったみたい」

愛李「あっそ」

美夕「ウチラも帰るべ」

瞳月、詩の家がある方向を眺める。

○詩の家・バルコニー（夜）

大、手を伸ばし、詩の手を取る。

詩、大の手を握り返さない。

大も、握りしめるような恰好ではなく、  
手に手を重ねるような形。

大「あのさ…俺、上手く言えねえけど」

詩「…」

大「オマエ、すげえよ」

詩「…」

大「この街のためとかじゃなくてさ、自分の  
ために生きろよ」

詩「だから、もう無理なんだって」

大「無理じゃねえよ」

詩「このまま目覚まさないかもしれないって」

大「まさか」

詩「ほんとだよ。医者が言ってたもん。そし

たらアタシ、殺人犯じゃん」

大「ほ、ほんとなのかよソレ」

詩「今まで、大に嘘ついたことないでしょ」

大「…でもさ、オマエ。まだわかんねえだろ。

目覚ますかもしれないだろ」

詩「それでも犯罪者じゃん。アタシ」

大「オマエ…」

詩「別に、いいんだ。もう」

大「よくないだろ」

詩「もう、全部、終わらせたかったから」

大「なんで」

詩「もう何もかもやだったんだよ。全部。み

んな」

大「…」

詩「踊りたくない」

大「それ、いつから？」

詩「ずっと。ずっとだよ」

大「マジかよ」

詩「誰も気づいてくれなかったし。アタシが

辛いこと。苦しんでること」

大「でもさ、俺は、俺は、オマエの踊り、好

きだぜ」

詩、手を引っ込める。

詩「最低」

大「あ、おい」

詩、窓を閉めると立ち上がる。

大「おい。おい」

大、窓を叩く。

詩、何も言わず去っていく。

大「おい。おいって」

大、ひとりバルコニーに取り残される。

○病院・集中治療室（夜）

瑠美、目を覚ます。

○詩の家・寝室（朝）

裕佳子、駆けこんでくる。

裕佳子「お嬢様。お嬢様」

詩「…何」

裕佳子「奥様、目を覚まされましたよ」

詩「え？」

詩、一瞬で目が覚める。

裕佳子、泣きながら詩を抱き寄せる。

裕佳子「すぐお着換えになってください。す

ぐ、病院に行きましょう」

詩「でも、学校が…」

裕佳子「学校には連絡しています。さ、すぐ」

○同・駐車場（朝）

詩、裕佳子の運転する車の後部座席に座っている。

詩の緊張した顔とは対照的な、興奮気

味に喋る裕佳子。

動き出す裕佳子の運転する車。

○中学・講堂

徳田が演台で喋っている。

徳田「最後になりますが、みなさん。明日から夏休みです。夏休みは、遊ぶためにあるわけではありません。浮かれることなく、2学期に向けての準備を進めてください。それから、みなさんに良いお知らせがあります。危篤状態だった柗詩さんのお母様が、目を覚まされました」

生徒たちからどよめきが起こる。

大、驚いた顔。

○病院・病室の前の廊下

裕佳子、詩を促す。

詩、自分のお腹を見ている。ほんの少し、ふっくりとしている。

裕佳子「さ、早く早く」

○(回想)バルコニー(夜)

ハンバーガーを2つ食べた自分。

○元の廊下

裕佳子「さあ早く。お嬢様」

詩、怯えた顔で入る。

○同・病室の中

瑠美、向こうを向いている。

裕佳子「奥様。お嬢様をお連れしました」

瑠美、ゆっくりと詩の方を向く。

詩、どきつとする。

瑠美、詩を見ると、笑顔を浮かべる。

瑠美「詩…来てくれたの」

詩「…はい」

裕佳子「奥様。大丈夫ですか？」

瑠美「まだ起きられないけど」

裕佳子「ご無理なさらないでください。お嬢

様の留学は予定通り進めておりますので」

瑠美「私ね、夢を見てみたい。空港で、詩を送り出した夢」

裕佳子「お嬢様が行かれるのは3週間後です」

瑠美「そう…良かった」

裕佳子「お嬢様。もつと奥様のそばに」

裕佳子、うつむく詩を促すも、詩、動  
こうとしない。

瑠美「あと3週間あるのね」

裕佳子「あまり、ご無理なさらないでくださ  
い。喋るのも、お体にさかりますから」

瑠美「大丈夫よ」

裕佳子「奥様」

瑠美「詩に、ひとつお願いがあるの」

詩「え？」

瑠美、天井を見上げたまま喋る。

瑠美「あのね…」

○詩の家・駐車場

車がいっぱい。

○同・舞踏会場

子どもたちがたくさんいる。

バルコニーには父兄の姿。

裕佳子、入室。

裕佳子「皆様、お久しぶりでございます。柊家で家政婦をしております菅井裕佳子でございます。まずは、皆様のご支援により、奥様の意識が戻りましたこと、厚く御礼申し上げます。奥様はまだ体調が万全ではございませんので、お嬢様の詩様が、皆様のご息ご令嬢のコーチを勤めさせていただきま

きます」  
父兄や子供たちから拍手が沸く。

#### ○同・回廊

詩、緊張した面持ちで立っている。

裕佳子の声「それでは柊詩コーチ、お願いいたします」

詩、動けない。

裕佳子が、内側から扉を開く。

裕佳子「お嬢様、お願いします」

わーっと歓声が沸く。

詩、緊張した顔で入室する。

○同・舞踏会場

バレレッスン。

詩、裕佳子の見守る中で、子供たちに  
教えている。

詩がお手本を見せると、歓声が沸く。

○同・駐車場

詩と裕佳子、頭を下げて最後の車を見  
送る。

裕佳子「お疲れ様でした」

詩「練習しないと」

○同・舞踏会場

詩、カーテンを閉め切り、チャイコフ  
スキーの音楽をかける。

詩、踊りはじめるも、ブリキの玩具の  
ようにぎこちない踊りしかできない。

無理矢理に体を動かそうとするも、  
音楽のテンポにまるで合わない。

○（回想）回廊の階段

詩、瑠美を突き落とすシーン。

○元の舞踏会場

詩、回転するも着地に失敗し、フロアに倒れ込む。

音楽が鳴りやむ。

その時、雨が降り出す。

窓を叩く雨。

激しいスコール。

詩、頭を押さえてうずくまる。

詩「やめて…やめて。お願い」

○同・回廊

裕佳子、詩の様子を伺っている。

階段の下を見る。

○（回想）階段下

裕佳子、階段から落ちた瑠美のもとへ。

見上げると、詩が両手を広げた状態の

まま、固まっている。

○元の回廊

裕佳子、入室しようとするも、止める。

○ラッキーピエロ・厨房

啓太「いいから。いいから」

大「大丈夫だって。俺、働けるから」

啓太「いいから。人は足りてんだ。散歩でも

してこいって」

大「父ちゃん」

大、店を出ていく。

○店の前の通り

大「あれ？雨降ってた？」

○近くの公園

大、ひとり散歩している。

外国人などの観光客、カップルや家族

連れなどがある。

瞳月「大じゃん」

大、振り返る。

瞳月がいる。

瞳月「よっ」

大「おお。瞳月じゃん」

○同・園内

大と瞳月、歩いている。

瞳月「大つてさ、詩ちゃんのこと好きだよね」

大「何言いだすんだよ。いきなり」

瞳月「バレバレだから」

大「そういうんじゃねえし。信じてもらえね

えかもしんねえけど」

瞳月「信じられないね」

大「ならいいよ」

瞳月「聞くなって話。話してみな」

大「なんか、気になんだよ」

瞳月「やっぱ惚れてんじゃん」

大「もういいや」

瞳月「ウソウソ。聞くから」

大「ほんとかよ」

瞳月「ほんとほんと」

大「まあさ、なんかさ、わかんないけど気になるんだよ。昔っから」

瞳月「ウチラはさ、中学からしか詩ちゃんの  
こと知らないけどさ…なんか怖いよ。あの  
子。機械みたい」

大「ああ」

瞳月「言わないでよ。ていうか、みんな言っ  
てるからね」

大「知ってるよ。そんなこと」

瞳月「マジで言わないで。函館にいれなくな  
る」

大「そんなかよ」

瞳月「そんなでしょ。大にはわかんないんだ  
よ」

大「結局、一人だったんだよ。アイツ。ずつ  
と」

瞳月「仕方ないじゃん」

大、瞳月を驚いた顔で見る。

瞳月「自分で選んだ道だよね」

大「…」

瞳月「なんか私、間違ったこと言ってる？」

大「…ああ。うん」

瞳月「なんか、そう言うリアクションがムカつくんだよ」

瞳月、大の肩を殴る。

大「殴るなよ」

瞳月「特別感、出すんじゃないやねえよ」

大「出してねえし」

瞳月「出してんだよ」

大「意味わかんねえ」

瞳月「オマエなんか、土方と一緒にだかんな」

大「は？」

瞳月「薩長連合に立ち向かうなんて無理じゃん。どう考えても」

大「そういう意味かよ。ていうか、五稜郭あつちだぞ」

瞳月「土方が死んだのはあつちだよバーカ」

大「なんなんだよ…まあさ、無理でも、やら

なくちゃいけない時ってあるだろ」

瞳月「カッコつけんな。負けたくせに」

大「負けてもやらなくちゃいけない時ってあるだろ。俺だって、今、函館攻められたら闘うぜ」

瞳月「誰が攻めてくんだよ」

大「いや、だから、それくらいの気持ちあるってことだよ」

瞳月「無駄にアツいんだよ。大」

大「うるせえなあ」

瞳月「諦めろ。オマエじゃ無理だ」

大「わかってるよ。わかってるけどさ…ほっとけねえよ」

瞳月「…向こうは、どう思ってたんだろうな」

○（回想）バルコニー（夜）

窓越しに去っていく詩。

○元の公園

大、鼻で嗤う。

瞳月「なんだ。そのリアクション」

大「別に。店戻らないと。じゃあな」

大、歩き去っていく。

瞳月「あ。大」

大「…」

瞳月「もう、あんま、ダセえことすんなよ」

瞳月、大の背中を見送る。

○詩の家・玄関

詩、体重計に乗る。

裕佳子、計測している。

2キロ、増えている。

詩「どうしよう」

○同・食堂（夕方）

詩、食事に手をつけようとしなない。

裕佳子「お嬢様、召し上がってください」

詩「いらない」

裕佳子「お嬢様」

詩「もうこれ以上、太れない」

○同・寝室（夜）

詩、眠れない。

チャイコフスキーの音楽に苦しむように、ベッドの上で右に左に大勢を変えている。

○同・駐車場

車でいっぱい。

○同・舞踏会場

詩、子供たちにセンターレッスンをしている。

裕佳子、詩を心配そうに見ている。

詩「そう。右手を伸ばして…」

詩、ボタンと倒れてしまう。

裕佳子「お嬢様」

詩の周りにみんな集まってくる。

○病院・病室（夕方）

詩、目を覚ます。

裕佳子「お嬢様。大丈夫ですか」

詩「え？アタシ…」

裕佳子「レッスン中に倒れたんです」

詩「え？レッスンは？どうなったの」

裕佳子「今日は中止にさせていただきました」

詩「やらなきや」

詩、無理矢理起きようとする。

裕佳子「お嬢様、辞めてください」

詩「やらなきや。やらないと」

裕佳子「お嬢様、大丈夫ですから」

詩、過呼吸のような激しい呼吸。

裕佳子「お嬢様、お嬢様」

医師が駆け込んでくる。

× × ×

詩、大人しく眠っている。

### ○元町公園

たくさんさんの観光客でにぎわっている。

その奥に見える詩の家。

○詩の家・舞踏会場

詩、カーテンを閉め切って練習。

チャイコフスキーの音楽に合わせて、

鬼気迫るような表情。

しかしまるで上手く踊れない。

○同・玄関

詩、体重計に乗る。

詩「なんで落ちないの。なんで」

詩、階段を上がっていく。

裕佳子「お嬢様」

詩「また練習するから」

裕佳子「お嬢様。あまり無理なさらなくてく

ださい」

詩「うるさい。黙ってて」

○同・舞踏会場（夜）

詩、練習している。汗だく。

疲労でぐったり。

コンコンと、窓を叩く音。

詩、バルコニーのカーテンを開ける。

大が立っている。

窓越しに、詩が叫ぶ。

詩「アンタのせいよ」

大「なんだよ。急に」

詩「アンタのせい。全部」

大「俺が何したってんだよ」

詩「変なの食べさせるから」

大「変なのってオマエ」

詩「体重が落ちなくなった」

大「ふざけんなよ。ウチのせいじゃねえよ」

詩「なんでよ。食べさせたじゃん」

大「オマエが、自分で食ったんだろぅが」

詩「食べさせた」

大「もういいよ。オマエとは絶交だ」

詩「…」

大「オマエは、俺の一番大切なものを傷つけ

た。もう、二度とこねえよ」

大、バルコニーから降りていく。

詩「あ…大」

詩、その場でしゃがみこんでしまう。

○詩の家・玄関

詩、体重を測っている。

裕佳子「ありがとうございます。もう、降り

ていただいて大丈夫ですよ」

詩、ちらりと裕佳子の計測シートを見  
る。

詩、裕佳子から計測シートを奪い取る。

詩「違うじゃん。コレ」

裕佳子「お嬢様」

詩「私の体重と違う」

裕佳子「でも」

詩「こんなことしても、すぐバレるんだから  
ね。すぐバレるんだから」

裕佳子「申し訳ございません。でも、お嬢様  
に無理してほしくないんです」

詩「ウソついたってダメなの。ウソは…」

裕佳子「お嬢様」

詩「ウソは」

裕佳子「少しお休みになってください」

詩「お母さまに会いたい」

裕佳子「お嬢様」

詩「お母さまに会わせて。今すぐ」

○病院・病室

瑠美、窓の外を見ている。

中庭。

そこでボール投げをして遊ぶ親子が見

える。冒頭シーン（瑠美29歳、詩5

歳）くらいの母と娘である。

娘が投げるのに失敗する。

母は笑い、転がったボールを拾いに

く。

二人、楽しそう。

瑠美、表情を変えず見ている。

病室をノックする音。

瑠美「はい」

裕佳子「失礼します」

瑠美「あら」

裕佳子「少し、お時間いただいてもよろしい  
でしょうか？」

瑠美「どうしたの？」

裕佳子「お嬢様が、奥様に話したいことがある  
そうでした」

瑠美「そう。入って」

裕佳子「お嬢様。どうぞお入りください」

詩、入室。

裕佳子、出ていこうとする。

瑠美「あなたもいてちょうだい」

裕佳子「承知いたしました」

瑠美「どうしたの？詩」

詩「お母さま…私」

瑠美「…」

裕佳子「…」

詩「ごめんなさい。私…わたし…」

詩、その場で泣き崩れる。

裕佳子「お嬢様。お嬢様」

裕佳子、詩を支える。

瑠美、詩を見ている。

瑠美「謝らないといけないのは私の方よ」

詩「お母さまは、お母さまは何も…」

瑠美「私は、あなたの気持ちに気付けなかつた」

○（回想） 転落するシーン

瑠美、詩に背中を押されて宙を舞うシ

ーン。

スローモーションのよう。

○元の病室

瑠美「私はね、正しいことをしてると思って  
いた。あなたを特別にしてあげること。特  
別にしてあげれば、人よりも幸せになれる  
と信じてた」

詩「（泣いている）」

瑠美「ごめんね。詩」

詩「私が、お母様を…」

瑠美「もういいのよ。詩」

詩「よくないッ。よくないです」

瑠美 「詩、ごめんなさい。私が悪かったわ」

裕佳子 「奥様…」

瑠美 「もう、バレエ、辞めてもいいから」

裕佳子 「奥様」

瑠美 「あなたの人生を生きて」

詩、瑠美に縋りつくようにして泣く。

詩 「いや…いや」

瑠美 「あなたが思うように生きて」

詩 「お母さま。お願い」

瑠美 「ほんとよ。詩。あなたの思うように生きてほしいの」

裕佳子 「…」

瑠美 「あなたを苦しめたくないの。自分で選んで、自分の人生を歩いてほしいって思ったのよ」

詩 「いや…いや」

瑠美 「(裕佳子を見て) この子のこと、もう

少しだけお願いね」

裕佳子 「奥様…それでは留学は？」

瑠美 「白紙にしてかまいません」

詩「お母さま」

瑠美「あなたのためなのよ詩。今はわからないかもしれないけど」

詩「私、バレエやります。やりたいです」

瑠美「心配なの。いつか、このまま突き進んでいったら、あなたが壊れてしまうんじゃないかって」

詩「大（大丈夫と言いかけ）：ごめんなさい。私のせいで。私の」

瑠美「詩。あなたには、自分でちゃんと決めた道を歩いてほしいの」

詩「自分で決めました。この道だって。この道だって」

瑠美「詩。これは、私が決めてしまった道なのよ。あなた自身ではないの」

詩「でも…でも」

詩、過呼吸のような症状になる。

裕佳子「お嬢様。お嬢様」

瑠美「お医者様呼んで。早く。早く」

裕佳子、部屋を飛び出していく。

すぐに医師が駆け込んでくる。

○詩の家・舞踏会場（夜）

詩、ひとり座っている。

立ちあがり、無理矢理踊ろうとするも、

ブリキの玩具のように体が動かない。

○病院・病室

瑠美と裕佳子。

瑠美、ベッドで起き上がれるように。

裕佳子「もう少しで、退院ですね」

瑠美「ありがとう。あの子は、大丈夫？」

裕佳子「今、必死で練習されています」

瑠美「そう」

○詩の家・舞踏会場

詩、練習中。でも上手くないかない。

○病院・病室

裕佳子「奥様が傍にいないと、上手くないかな

いんです」

瑠美「それじゃあ、ダメなの。いつまでも、私が一緒にいてあげられるわけじゃないんだから」

裕佳子「奥様」

瑠美「…」

裕佳子「奥様は、残酷です」

瑠美「そうよね」

裕佳子「確かに、お嬢様は悪いことをされました」

瑠美「悪いことって？」

裕佳子「それは…その」

瑠美「あの子は、何も悪いことはしてないわ。悪いことをしていたのは私よ」

裕佳子「失礼いたしました」

瑠美「あなたにも、苦勞をかけてばかりね」

裕佳子「いえ。そんな…止めてください」

瑠美「私が退院したら、少し休暇でもとってちょうだい」

裕佳子「ありがとうございます。あの、ほん

とに留学は白紙でよろしいんでしょうか？」

瑠美「今のまま行っても意味がないわ」

裕佳子「…奥様」

○詩の家・舞踏会場

詩、踊るのを止める。

詩「もう…無理だ」

バルコニーの窓をたたく音がする。

詩、バルコニーの方へ行く。

大がいる。

大「よお」

詩「バレエ、辞めるから」

大「いつも、いきなりだな」

詩「母親に、突き落としたことも言った。そ

したら、バレエ辞めても良いって」

大「オマエ、ほんとにそれでいいのかよ」

詩「大にはわかんないんだよ」

大「俺にはわかんねえよオマエのことは」

詩「じゃあ、黙っててよ」

大「でも好きなんだよ。オマエが躍ってるの

が」

詩「…」

大「俺は、バレエのことなんか何もしらねえよ。しらねえけど、俺は、ここから、ずっとオマエを見てきた」

○（回想）バルコニー

幼少期の大。バレエの練習をする詩を見ている。

○元のバルコニー

大「きつと俺だけじゃねえよ。オマエのバレエが好きなの。そんなのオマエには関係ねえかもしれないけどさ、そういう奴もいるんだよ」

詩「今日、母さんに辞めるって言うてくるから」

大「オマエ、ほんとにそれでいいのか？」

詩「いいよ。いいの。だって、もう踊れないんだもん。自分が大嫌い」

大「諦めるなよ」

詩「うるさい。大になんか何もわかんないんだよ」

詩、去っていく。

大「おい。おいって」

○病院・病室

詩、瑠美の前でうつむいている。

瑠美、笑顔を浮かべる。

瑠美「そう。良かった。あなたが決めてくれたのなら、私は応援します」

裕佳子「奥様」

瑠美「最後に、一つだけいい？」

詩、顔を上げる。

瑠美「これまで、お世話になった皆様の前で、踊って差し上げて」

詩「え？」

瑠美「精一杯の感謝の思いを込めてね」

詩、驚いた顔をする。

○詩の家・全景

大や愛李たち同級生、バレエの生徒たち、たくさんの人達がやってくる。

○同・舞踏会場

舞踏会場の半分ほどを観客が埋めている。

愛李「なんか、バレエ辞めるんだってね」

美夕「マジなの？ソレ」

大、瞳月の視線を受けながら、黙って前を見つめている。

裕佳子が入ってくる。

裕佳子「本日は、お集まりいただきましてありがとうございます。皆様から厚くご支援いただいております。皆様から厚くご支援いただきまして、本日で、バレエを辞めさせていただくこととなりました。

最後に、これまでご支援いただいた皆様の前で踊らせていただく機会をと思ひまして、本日、お集まりいただきました次第でござ

います。短い時間ではございますが、最後まで楽しんでご覧くださいませ」

裕佳子、音響機材の前へ。

詩、入ってくる。どよめきのような、心配するような声が沸く。

裕佳子がチャイコフスキーの音楽（眠れる森の美女）をかける。

詩、音楽に合わせて踊りはじめる。

ブリキの玩具のように、バラバラなフォーム。

観客から、失望や落胆、驚きの声が漏れる。

それでも、詩は踊りつづける。  
フォームもステップも、すべてバラバラである。

愛李「ヤバいじゃん。アレ」

美夕「何、アレ？」

大、真剣な顔で見ている。

詩、本当に苦しそうである。

大、思わず立ち上がり、叫ぶ。

## 大「頑張れ」

すると、見ていたバレエの生徒たちや他の観客からも声援が続く。

あちこちから、バレエの会場には不似合いな「頑張れ」の声援が沸く。

愛李や美夕、瞳月も応援している。

詩、それでもうまく踊れない。

大や観客たちは、チャイコフスキーの音楽が掻き消えるほど声援を上げている。

すると、段々、詩の踊りが変わっていく。

チャイコフスキーの音楽というより、観客の声援に合わせて、声援に滑るようにして踊りが滑らかになっていく。

【心配】色だった声援が、どンドン、熱い歓声に変わっていく。

自分たちの知っているバレリーナの詩が戻ってきたという喜びが、熱気となって重なっていき、舞踏会場を埋め尽

くしていく。

裕佳子、泣いている。

詩の踊りが、たくさんの人を熱狂させている。

詩も、泣いている。

チャイコフスキーの音楽が終わっても、

詩は踊りつづける。

詩は、観客たちのひとりひとりの表情に、感動している。

詩が躍りを止める。

観客からは万来の拍手。

あちこちから、止めないでという声が沸く。

愛李たちも、止めないでと叫んでいる。

そして泣いている。

詩、観客の前で一礼すると、

詩「今日は、こんなにたくさんの人に集ま

っていただけで、本当に、ありがとうございます

이었습니다。私は、バレエを辞めるつもりで

いました。自分のことが嫌いで、大嫌いで、

もう、生きていたくないくらい大嫌いにな  
って、だから、何もかも辞めたくって：で  
も、今日、こうして、みなさんの顔を見て、  
みなさんが喜んでくれるのを見て、バレエ、  
やりたいって思いました」

観客から歓声が沸く。

裕佳子、思わずその場に泣き崩れる。

詩「私：イギリスに行きます。行きたいです」

#### ○病院・病室

瑠美、中庭を見ている。今日は誰もい  
ない。

裕佳子、駆けこんでくる。

瑠美「どうしたの？珍しいじゃない。そんな  
興奮して」

裕佳子「奥様」

瑠美「何？」

裕佳子「まだ、間に合いますか？」

瑠美「何の話？」

裕佳子「お嬢様、留学します」

瑠美「え？」

裕佳子「皆様の前で宣言されました。ご自分の意思で、留学しますって」

瑠美「…」

裕佳子「やっぱりバレエが好きだったんです」

瑠美「…」

裕佳子「奥様。お嬢様が自分で選んだんですよ。バレエの道に進むって」

瑠美、顔を両手で覆う。

裕佳子、瑠美に抱き着く。

裕佳子「もう大丈夫。大丈夫です」

○シーポート公園

T・「一週間後」

詩（日傘持ち）と大、歩いている。

大「いいのかよ。こんなところ散歩して。来週だろ」

詩「大丈夫」

大「まあ、俺はいいんだけどさ」

詩「最後だもん。もう」

大「もう、日本帰ってこないのかよ」

詩「それが、理想じゃん。バレリーナとしては」

大「まあ、そうだけどさ」

詩「うん」

大「俺は、この街に残るぜ。死ぬまで、ここから出ない」

詩「うん」

大「まあ、頑張れよ」

詩「うん。大も」

大「俺は、何も変わらねえよ」

詩「…ありがとう」

大「何だよ。いきなり」

詩「色々」

○（回想） 舞踏会場

大が立ちあがり、頑張れと叫んだシーン。

○元の公園

大「ああ。うん」

詩「でも、もうこれ以上は太れないから」

大「ウーロン茶だけ呑んどけよ」

詩「ていうか、なんで送別会がラッキーピエ

ロなの」

大「そりゃ、ウチの店だからだよ」

詩「他にあったでしょ」

大「ねえよ。世界で一番うまい店なんだ」

詩「ウソだあ」

大「ウソじゃねえし」

詩「函館から出たことないくせに」

大「あるわ」

詩「どこ？」

大「札幌とか…」

愛李の声「おーい」

愛李たちがやってくる。他の同級生た

ちも。

詩と大、みんなに手を振る。

詩「じゃあ、行こうか」

大「…なあ、おい。まあ、頑張れよ」

詩「うん」

大「ここは、ずっとオマエの街なんだからな」

詩「うん。ありがと」

詩と大、見つめ合う。

詩「まだなんか言うことある？」

大「別に…ねえよ」

詩「もう、最後だよ」

大「じゃあ：チャイニーズチキンバーガーは、

世界で一番うまい」

詩「ウソだあ」

大「ほんとだよ。バカヤロー」

詩「ウソだあ」

詩と大、みんなのもとへ行く。